



「ふくねこ」は、みんなが主役になり、  
誰かの役に立つ喜びを感じられる場所

「タウンモビリティはもう要らないね」といえる笑顔あふれる街を目指して



●聞き手 太田美由紀 (ライター)

## 笹岡和泉さん

NPO法人福祉住環境ネットワークこうち (愛称) ふくねこ (理事長)

高知の中心「はりまや橋」近くの商店街に「タウンモビリティステーションふくねこ」が開設され、4月で1年を迎える。「タウンモビリティ」とは、障害があっても高齢になっても、誰もが出掛けたい場所に出掛けられる、移動の権利を保障する仕組みだ。笹岡和泉さんは、福祉住環境整備を柱に据え、行政、商店街、支援者、当事者を緩やかにつなぎ、物理的、精神的なバリアフリーを目指し活動している。

### 誰もが安心して街へ 出掛けられるサポートを

「タウンモビリティステーションふくねこ」を開設して4月で1年を迎えます。「タウンモビリティ」とはどんな取り組みなのでしょう。

笹岡 「タウンII街」「モビリティII移動性」という意味です。障害があっても、高齢になっても、移動に不便を感じている方が誰でも出掛けたい場所に出掛けられるように、移動の権利を保障する仕組みです。1979 (昭和

54)年にイギリスのショッピングセンターで、「ショップモビリティ」として車いすや電動スクーターの貸し出しを行ったのが始まりで、日本では99 (平成11)年の広島での取り組みが最初だといわれています。高知で始めるに当たっては、福岡県久留米市のタウンモビリティを視察に行き、参考にしました。

—実際に笹岡さんたちが高知で活動を始めたのはいつ頃ですか。

笹岡 2011 (平成23)年9月です

## PROFILE ●ささおか・いずみ●

1971年、高知県生まれ。福祉住環境コーディネーター。2級建築士。九州産業大学芸術学部卒業後、設計事務所、設備会社住環境部などを経て福祉住環境設計事務所「やさしいまち工房」を設立。実務で現場に携わりながら、NPO活動では、相談対応、アドバイス、情報発信、啓発活動などにも力を注いでいる。福祉住環境に関するセミナーなどでの講演依頼も多い。

から、5年ほど前です。当初、今のような拠点はなかったんです。2年間、高知市中心商店街で行われる9月の「高知街ラ・ラ・ラ音楽祭」、12月の「ひとまちふれあいフェスタ」(高知県、高知県社協主催の障害者週間の行事)というイベントに合わせて年2回活動していました。回を重ねるごとに少しずつ利用者も増え、利用した人から「こういうサポートがあれば安心



ん広がっています。

「ふくねこ」の一番人気は童謡教室。開催日が第2土曜日ということもあり、屋外で行っていたときからの利用者さんをはじめ、ボランティアやスタッフ、歌声を聴いた通りすがりの方など、いつもスペースに入りきらなくらいになるんです。手話カフェも満員御礼が多いですね。開設からもうすぐ1年ですが、障害のある方や高齢者だけでなく、商店街に買い物に来た方、観光客など、幅広い人がつながる場所となってきたことをうれしく思います。

### 体の状況に合わせて環境を整える方法

―笹岡さんの本業は福祉住環境コーディネーターということですが、福祉住環境に興味を持ったきっかけは？

**笹岡** もともとは大学で美術の勉強を

中の自分の経験も踏まえてバリアフリーを提案すると、「コストがかかるし特別なことはまだ必要ない」というお返事でした。数少ない増改築のタイミングに、将来のことを考えないのかなと思いましたが、当時はやはり「特別なこと」と受け取る人が多かったように思います。そういうことが続いて、私もなんとなくモヤモヤしていたんですね。



ともちゃん（写真右）は、笹岡さんが大学生時代に手術した際、同じ病院に入院しており小学生だった。「それ以来約20年の友達です」（笹岡さん）

していたので、美術の先生が博物館学芸員を目指していました。私は、1歳半のときに「ビタミンD抵抗性くる病」（2015〔平成27〕年7月から指定難病）と診断されていて、成長とともに下肢が変形して何度か手術を受けています。なのに、やんちゃで頑張り過ぎてしまう性格なので、大学時代は一人暮らしをしながら無理をして骨折して入院、また無理をして骨折……と、繰り返しながらなんとか6年で卒業しました。卒業はしたものの、無理がたたって9カ月ぐらい歩くことができず、長期療養を余儀なくされた期間もありました。「このままずっと歩けないのかな」と思っていたころ、ケースワーカーの勧めで、埼玉にある職業リハビリテーションセンターのインテリアデザイン科で学ぶことにし、建築やパースを学び、その後、高知で設計事務所に就職しました。

―バリアフリーという言葉は浸透していても、緊急性の低い改築はニーズが少なかったのかもしれない。

**笹岡** そんなとき、本屋で「福祉住環境コーディネーター」というテキストに出会ったんです。テキストには、福祉の歴史をはじめ、関節リウマチ、脳血管障害、パーキンソン病など高齢者に多い疾患についての情報、障害や疾患に合わせた福祉用具、住宅改修の建築の施工方法などがありました。

私は足が全く動かなかった療養時期には、腕で足をよいしょと持ち上げ、お尻で階段を上がっていました。当然のように、もともとある建物や環境に自分が合わせていたわけです。先天性の障害だったので自分が環境に合わせていることには特に疑問を持っていませんでしたが、そのテキストには「どんな障害や身体状況でも、それに環境を合わせる方法がある」と書いてありまし



―そうしたご自身の経験から、福祉住環境に関心を持ったのですか。

**笹岡** 「障害があったから福祉の仕事？」と聞かれることが多いんですけど、実は、私は子どものころからあまり障害があるとは思わずに育って来たんです。小学校や中学校で手術もしましたが、親は普通校に通わせてくれました。親は普通校に通わせてくれたらいいなと、学生時代は福祉の仕事をしたほうがいいなともありません。

福祉住環境に興味を持ち始めたのは、設計事務所で働き始めてからです。あるとき、高齢のご夫婦から増改築をしたいと相談があったので、長期療養

た。ビビッと来ましたね。

「どんな重い障害があっても、高齢になっても足腰が悪くなっても、その人が建物に合わせて無理をして頑張らなくていいんだ！ 便利な福祉用具や介護サービスを受けて、その人や、体の状態に合わせて環境を整えるという方法があるんだ！」って。

私がやりたいのはこれだ！と、すぐに会社を辞めて勉強を始め、検定試験に合格しました。その後すぐに高知の設備会社の住環境部に入社して、障害者や高齢者の住宅改修の仕事を担当し、大阪や東京などの勉強会に参加し、福祉住環境に取り組み全国の仲間とつながっていききました。

### さまざまな職種が連携してバランスよく取り組む

**笹岡** すると、またふつつつと疑問が湧いてきたんです。進行性の疾患や高齢の方の場合は、建築の視点だけでは



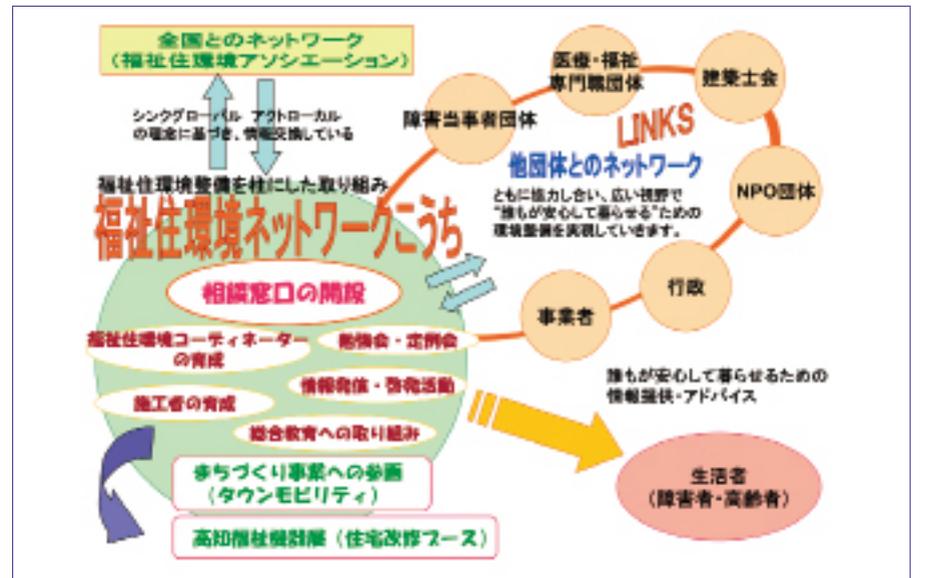
**笹岡** 改修のアドバイスのために一人一人にお話を伺うと、「家だけが暮らしてやすくなっても街には出掛けられない」「外出は諦めている」という声が上がってきます。本当は、「近所の喫茶店に行きたい」「買い物に行きたい」「友達に会いたい」という思いがあっても、です。これは、まちづくりという視点でも考えなければならぬ



思っているとき、10（平成22）年に高知県主催の障害者週間の集い、「ひとまちふれあいフェスタ」の実行委員の要請をいただきました。実行委員にはさまざまな方がいらっしやいました。障害当事者団体、高知市障害者福祉センター、高知市障がい福祉課、高知県障害保健福祉課、高知県社会福祉協議会、高知県立大学社会

どうしても足りません。医師、理学療法士、作業療法士、ケアマネジャー、ヘルパー、医療介護福祉など、さまざまな職種と一緒に建築の専門職がパランスよく取り組まないと解決できないことが多い。さらに、介護保険が始まったところは、本当にその人に必要な改修につながるというケースや、高額を請求される悪徳リフォームのような問題が増えていました。当事者は、お世話になってケアマネジャーさんや建築の偉い先生には、遠慮して本当の希望を言えないこともあります。第三者機関として公平中立に相談を受けてアドバイスできる人が必要だと思いううになりました。

やアドバイスの取り組みを始めました。大阪で介護保険が始まる前からそういう取り組みをしている団体があり、参考にさせていただきました。NPO法人化は2006（平成18）年です。それ以降、高知県や高知市から住宅改修アドバイザー事業の委託を受け、「住宅改修の助成事業を使いたいけれども、どういうプランが本人に合っているか判断しづらい」という場合に、実際にその住居にうかがってアドバイスをするとという仕事もさせていただくようになりました。



福祉学部、NPO法人こうち音の文化振興会、帯屋町商店街青年部次世代グループなど、ほかにもたくさんの団体が参加していました。

実行委員会では、出掛けるのを諦めている人、出掛けることが難しい人に出掛けてもらうには、どうしたらいいかという話し合いがもたれました。全国の福祉住環境に取り組んでいるNPO仲間から、久留米の「タウンモビリティ」についての報告を聞き、すぐに視察に行き、その話を実行委員会皆さんに伝えたら、賛同を得られ、今に至ります。当時の実行委員のメンバーで、ふくねこのスタッフとして活動してくださっている方も多くいらっしゃいます。

**移動サポートだけでなく  
高知の街を笑顔にする効果**

常設から1年が経ち、手応えとしてはどんなものがありますか。

**笹岡** 最初にお話ししましたように、移動サポートと、情報の拠点を目指して始めた活動ですが、それに留まらず、高知の街を笑顔にする効果が広がってきていると感じています。

例えば、学生ボランティアさんにとつては障害のある方と接したり、コミュニケーションを取ったりする練習の場になりますし、高齢の方や障害のある方にとっては、若い学生さんたちとの会話を楽しみながら、食事や買い物を楽しむことも喜びになります。また、自分自身の障害について伝えることで学生さんたちを育てることもできると実感してくださっています。

障害当事者であっても、「ふくねこ」にボランティアとして参加して、自分の「居場所」を見つける方もたくさんいらっしゃいます。ある知的障害の方は、高齢者の話し相手や車いすの介助をすることが生きがいとなりグループホームに就職されました。

に、私の力ではありません。ここに集まる人たち同士で何かが生まれて、プラスの変化が次々に起こっているのだと思います。

隔離された場所ではなく、街なかのいろいろな人が出入りしやすい場所があり、誰でもふらっと立ち寄れる。ここに来れば、知っている人がいる。失語症、精神疾患、脊髄損傷、脳卒中、視覚障害……、さまざまな障害がある人、支援する人たちが集うこの場所は、素直に自分らしく生きていく人が集まる場所になってきています。ここ



「ふくねこ」でのイベントも、利用している方たちからのアイデアでどんどん広がっているようですね。

**笹岡** 特に、月に2回行っている脳卒中当事者のピアサポートのサロン「脳☆天気」からは、さまざまなアイデアが生まれます。昔の仕事や趣味のお話から、「じゃあ、それをここで教室にしてみたら？」という話に発展し、「みんなが先生プロジェクト」が誕生しました。唐岩さんの鳥ぞうりのほかに、元・保育士の吉本さんの「絵本から学ぶ子育て」、パソコン教室の話も

ではよろいを脱ぐのが当たり前。皆さん、「よろいを着たままだでは恥ずかしくなって、つい本音を話しちゃう」「すぐ気持ちが悪くなる」と言ってくださいます。それは学生さんと同じです。

とてもオープンな場で、利用者もスタッフもボランティアも、皆さんがフラットな関係ですね。

**笹岡** ここは、みんなが対等です。お互いさまで成り立っている場所だから、嫌なことは断つてもいいし、無理をしなくてもいいと思います。専門職の視点からは「障害者≠弱者」と捉えがちですが、いろいろな場面で障害者が社会資源になり得るということをこの場が証明していると思います。全国の保健師の皆さんにも、地域のボランティア、NPO活動、住民の方や民生委員さんと同じように、ぜひ障害のある方を社会資源としてうまく連携

▲「ふくねこ」の朝はシャッターを開けるところから。シャッターは重く、笹岡さんだけでは開けられない。「いつも皆さんに助けられています！」(笹岡さん) ▼童謡教室が始まる前のひととき。「ふくねこ」にはいつも笑顔があふれる



生まれています。みんなが主役になり、誰かの役に立つという喜びを感じられる場所になってきているのです。

誰かの役に立ってということで、人はどんどん変わっていきます。「私なんて」と言っていた人が、元気に頑張って意欲的になって、「こんなことやりたい」「こんなところへ行きたい」と次の意欲がどんどん生まれ、提案できるようにになっていく。それはもう本当

していただきたいですね。そうすれば、高齢の方や障害のある方が、地域の中で役割を持って生きていくということにつながるのではないのでしょうか。地域包括ケアシステムの新しい可能性が見えてくるはずですよ。

私たちの最高の目標は、「タウンモビリティはもう要らないよね」となることです。いつでもどこでも、お互いが当たり前にサポートできたり、声を掛けたりするようになれば、タウンモビリティは必要ありません。あくまで目指しているのは日常です。この先、2年、3年を見越しながら、さまざまな専門職の方や、元気な高齢の方、小さなお子さん連れの方、いろいろな層にこの場に立ち寄ってもらえるようにしていきたいと考えています。そして、皆さんの力を借りて笑顔の増えるまちづくりに関わっていきたい。私は、それが、ノーマライゼーションの原点だと考えています。